

フランスの服飾文化研修報告

—— 歴史的タペストリーとART TO WEAR ——

A Report on a Study of Costume in France

泉 山 幸 代

Sachiyo IZUMIYAMA

I はじめに

西洋衣服の変遷を調べている筆者にとって、衣装の流行と織物産業の関係はどうであったのか、ヨーロッパの人々はどのようなテキスタイルや、装飾を求めてきたのだろうか、常に興味、関心のあるテーマである。フランス第二の都市リオンは、フランス宮廷が衣装流行の発信地となった18世紀から現在に至るまで、絹織物の主産地として世界的に名高い。いつかりオンを訪れ、織物の調査、研修を行いたいと望んでいた。

ヨーロッパにおいて生活美術工芸品として高く評価されている歴史的タペストリーは、そこに描かれ織り出された服飾の表現は、当時の衣服形態を的確にとらえ、服飾史研究の重要な資料である。

このレポートは平成13年8月5日から12日までの8日間、国際服飾学会主催によるフランス服飾文化研修旅行に参加し、パリ、リオン及び歴史的タペストリーを有するバイユー、アンジェでの研修概要である。併せて8月2日から4日まで、第19回国際服飾学術会議において開催された衣装展示「ART TO WEAR」についても報告する。

II 研修内容

1. リオン

リオンはフランス南東部、ローヌ県の県都でパリの南東460kmの地点にあり、ガリア・ローマ時代からすでに都市として繁栄していた古い街である。市街を流れるソーヌ川とローヌ川は北から南へほぼ並行して流れ、旧市街と新市街を分ける境界線の役割を果たしている。まず町の両側に位置するフルヴィエールの丘に向かった。丘上のテラスからはリオン市街の大パノラマが広がった。(写真1・図1) 建物の屋根の色が薄いオレンジ色に統一されていて目に優しい。

この後ソーヌ川西岸の旧市街へ向かう道には、14,15世紀の建物が点在し、川に架かる橋はどれも100mほどで、ゆっくり歩くのに格好の規模であり、時間が許せば散策を楽しみたいほどだった。旧市街クロワ・ルースの丘は絹織物の地域である。現在もジャガード織、リオン織の絹工房が集まっている。最盛期には300人以上の職工が働いていたが、現在は工房の数も減少し、職人も全盛期の3分の1という話を聞き、繊維業界の厳しい現実が世界的な状況であることを再認識した。しかし国際シルク協会が置かれているリオンでは、長い歴史を背景に、絹



図1 フランスでの研修地



写真1 フィヴィエールの丘からみたリヨ南市街

のプリントの分野への進出とともに、現在オートクチュールの布地を製作している。

(1)リヨンの紋織物

リヨンの絹織物の美は紋織物にあり、その紋織物の特徴は多くの色系や金銀糸を使い様々な組織を組み合わせ、重厚で豪華な風合いを持っていることである。この紋織における最大の発明はジャガードである。ジョセフ・マリー・ジャカルは1801年に紋織物を完成させ、1806年に彼の発明はフランス国家に買収され、その後急速に世界各地へ普及していった。穴をあけたカードによる制御は現在の機械計算機やコンピューターと同様の発明であったろう。(写真2) リヨンが絹の都といわれる所以は、リヨンの人々の織機の改良、発明があつてのことである。それゆえリヨンの紋織物は、複雑な仕組みを持つ技術によるものであり、洗練された芸術性をそなえた文化であると言える。

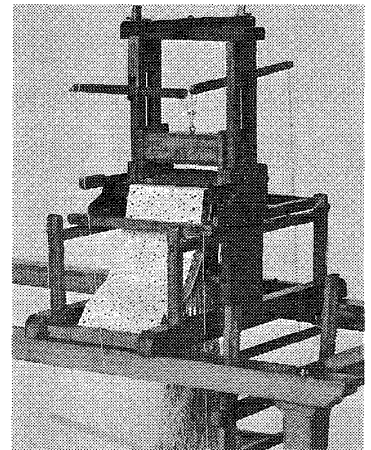


写真2

ジャガード織機 (1805年-1876年)

(2)リヨン織物歴史美術館

リヨンの絹織物は15世紀、ルイ11世が絹織物業を興すよう勅令を出して以来、フランス国家経済の重要産業である。18世紀中頃ロココ期の衣装は贅をつくした絹織物貫きには語れない。19世紀中頃に流行するクリノリン・ドレスは絹織物を大量に使用したためリヨンはますます繁栄し、クリノリン・ドレスを生み出したオートクチュールの創始者ウォルトのみならず、デザイナー達がリヨン製の織物を使用することから、リヨンの名声はますます高まっていった。

このような経過のなか、リヨン織物歴史美術館は、1890年に設立されて以来、リヨン商工会議所によって管理されている。(写真3) 建物は18世紀を通してリヨンの知事官邸であったもので、随所に当時の優雅さを漂わせている。

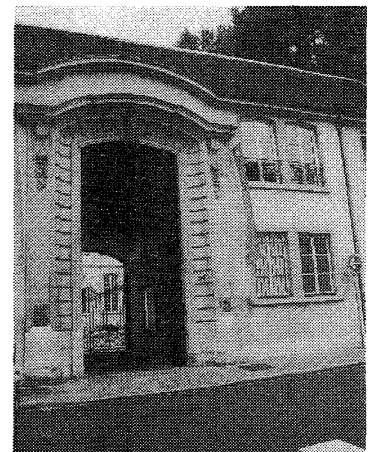


写真3 リヨン織物歴史美術館

1962年に増築されて展示室が大幅に増え、現在は31の展示室から構成されている。収蔵品は様々な技術で装飾された染織を広い範囲でとらえた世界屈指のものである。古代の織物（コプト、エジプト、ササン朝ペルシャ、ビザンチンのものなど10世紀までのもの）、14世紀から17世紀にかけてのペルシャの絹織物、16世紀から17世紀のオリエントの絨緞、そして東アジア（中国、

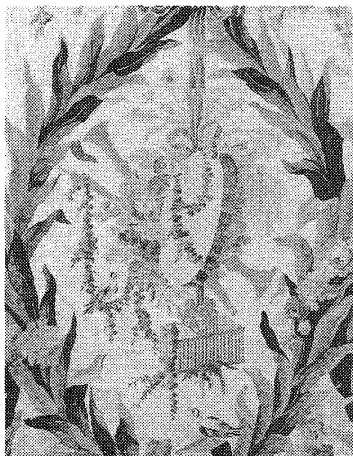


写真4 リオン織物歴史美術館
リオン市より王妃マリーアントワネットに献ぜられた壁布の部分縫取錦（18世紀）

日本、朝鮮）の収蔵品が展示されている。また、ルネサンス期のイタリア、イスラム時代のスペイン、シチリアの織物も見られる。衣装に使われた絹織物という視点からは、18世紀から19世紀にかけての典礼用の祭服、17世紀から19世紀のリオンの絹織物による衣装も数多く収蔵されている。（写真4・5・6）。

リオン織物歴史美術館において必見すべきは、シャルル・ド・ブrou伯爵のプールポアンである。プールポアンとは本来「刺し縫い」する意味で武装の間着であったものが、表着として着用された1364年以前の現存する唯一のプールポアンである。（写真7）服飾史の本には必ず登場するので見学するのを楽しみにしていた。錦織で作られ、前中央に32個、袖に20個のボタンがついている。体にフィットさせるために筋肉の動きに合わせて複雑に縫い上げられている構成は大変興味深い。しかし一週間前から修復期間に入ったとのことで見ることはできなく、次の機会を待つこととなった。

(3)リオンの絹染色工房L'ATHLIER DE SOLERE見学

リオンは機織の町であるが、絹染色が行われるようになって約40年になるという。この分野でリオンの名を高めているのは、オートクチュールのための布地染色であり、また絹地を使っての絵画作品である。今回スカーフやマフラーなどのプリントを行っているアトリエを見学した。ここの工程はリオン式プリントと説明があったがセリグラフィと呼ばれている、万国共通のプリント技法である。一色一枠で、つまり10色入れるのであれば10の枠が必要



写真5 リオン織物歴史美術館
捺染緋白地花束リボン文様（1760年）



写真6 リオン織物歴史美術館
シルクブローケードのドレス（1730年）



写真7 シャルル・ド・ブrou伯爵のプールポワン（14世紀中頃）

となり、実際に染色する技術を見せていただいた。(写真8・9) 合成染料を使用し、色が完全に乾いてから圧力鍋に入れ圧力1.5バールに上げ、温度105℃～110℃、50分間蒸す。その後多量の水で洗い流す。色を固定させるには時間と温度の微妙な調整が必要であるとのこと。手染めのスカーフは一日30枚位しか作ることはできなく、機械で染色するならば一日5～6千枚は可能との説明に複雑な想いが残った。2階の工房では、ビロード織のスカーフに手染をしている作業を見学した。カトリーヌさんと呼ばれる女性は服地の手染も手がける専門家である。リヨンの町は絹のプリント分野での活躍がこれからも続くことと思った。(写真10)

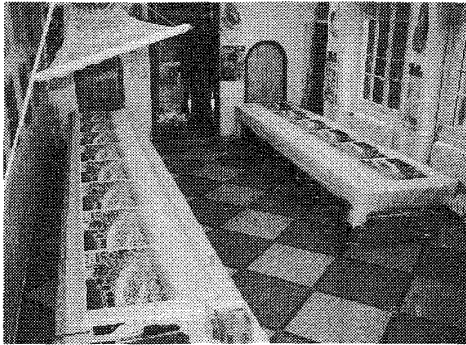


写真8 リヨンの絹染色工房

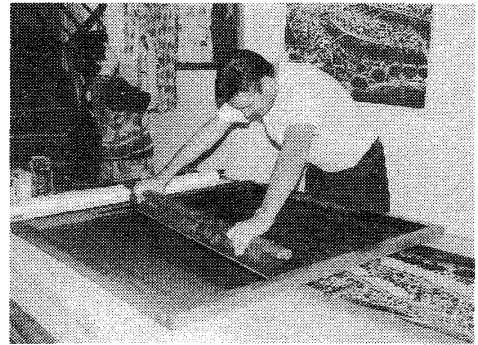


写真9 絹染色工程

2. バイユーのタペストリー

バイユーはノルマンディ、ベザン地方の中心地で第2次世界大戦時も幸い戦火を逃れたため、中世そのままの町並みが残されている。17世紀に建てられた旧神学校が現在「バイユー・タペストリー美術館」となっており、この歴史的タペストリーが保管されている。

11世紀の服飾を考えると、必ずと言ってよいほどバイユーのタペストリーが思い浮かぶ。それは11世紀の人々の生活を今に伝える貴重な価値を有するタペストリーだからである。衣服は勿論のこと、料理、武器、船の構造、狩猟、馬具にいたるまで当時の風俗・習慣を知ることができる、かけがえない歴史を教えてくれる。

バイユーのタペストリーと呼称されているが「タペストリー」の語は正確ではない。図柄は織り込まれているのではなく、幅は50cmに過ぎないが、全長70mの極めて壮観なこの作品は、実は刺繍作品である。つまり絵と文字による「刺繍文書」なのである。タペストリーと言っているが、灰褐色の薄い麻地に極細の毛糸で、バイユー・ステッチ（レンドアンドコーチド・ステッチ、アウトラインステッチ、ステム・ステッチ）により壮大な刺しゅうが施されている。(図2) この超大型装飾用刺繍壁かけは、バイユー大聖堂の身廊に、柱から柱へと懸けられていたと推測される。

それではこのタペストリーは何が記されているのか。これはほぼ200年前から、研究者達の

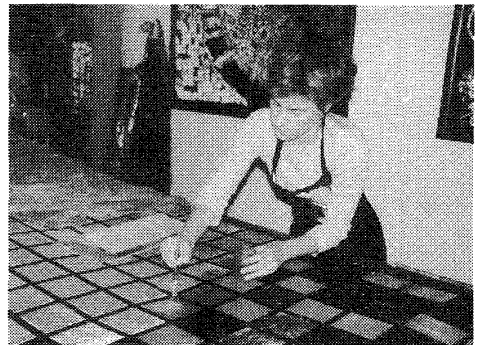


写真10 絹染色工程

議論がくり返されている。結論は1066年ノルマン公ギョームによるイングランド征服の模様を描いていると言う。この見事な刺繍絵には626人の人物（内婦人は3名のみ）、船41、建物37、馬202頭、35匹の犬、506匹の動物が登場し、作品は生き生きとした躍動感が一杯にあふれている。つぎにどのようにして作られたのか。ギョームの異母兄弟にあたるバイユーの司教オドン・ド・コントビルが、自分の聖堂への奉納を目的として1070年から1080年にかけて、アングロ・サクソンの工房に注文したと言われている。

この刺繍文書は900年にわたる時間を経ているにもかかわらず、色彩は（8色赤茶色、青緑色、灰緑色、淡黄色、青、濃緑、黄色、黒に近いブルー）驚くべき鮮やかさを保ち、さらに針の跡が鮮烈に残っていることは大きな驚きであった。照明を落としているので目を凝らしてじっと見ていると、長い年月の経過を忘れてしまうほどに見入ってしまう。隣の方に迷惑をかけないように流れの中に入っての見学であったが、他に例を見ない芸術作品の鑑賞は十分に満足できるものであり、観察者を惹きつけてやまないほどに歴史のディテールが秘められていると思う。（写真11・12・13・14）

LE POINT DE BAYEUX

C'EST UN POINT DE BRODERIE TRÈS SIMPLE
IL SE FAIT EN TROIS TEMPS:

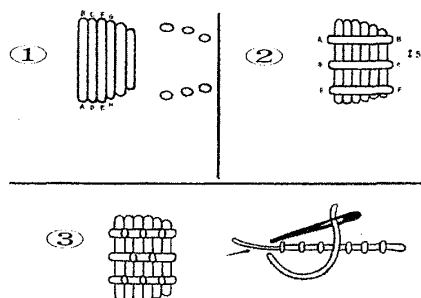


図2 バイユー・ステッチ

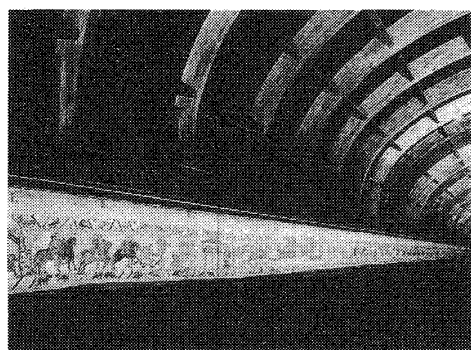


写真11 バイユーのタペストリーギャラリー

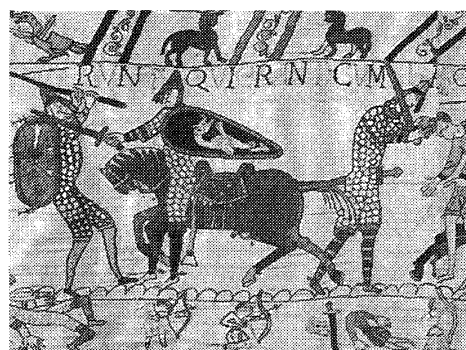


写真12 バイユーのタペストリー



写真13 バイユーのタペストリー



写真14 バイユーのタペストリー

3. アンジェの世界最大のタペストリー

アンジェ城内にあるギャラリーにて、1382年頃に制作された世界最大タペストリーを見学した。高さは4.5mだが、長さが103mあり、まずその大きさに驚き、圧倒される。「ヨハネの黙示録」の写本に基づいて、76の神秘的な場面から構成されている。(写真15・16) アンジュ公ルイ1世のために兄のフランス王シャルル5世が、1373年から制作を依頼し、約10年の月日を費やし、優れた職人の技術的にも最高峰の芸術的価値の高い作品である。黙示録は聖ヨハネが紀元後1世紀末に綴った文書で、最も難解なキリスト教文学を下地にしたこのタピストリーは、百年戦争の真ただ中であつた14世紀末の社会的、政治的情勢を数多く伝えてくれる。王家の注文であることがわかるほどにその大きさ、形、技術的にも野心を反映してのタピストリーであることを、後世の人々に十分に伝えている。図像は立体感とともに細部にわたる写実性が見事に調和している。ギャラリーの中は作品保存のため外光を遮断した半暗闇にしてある。タペストリーの赤・青の背景色が多いこともあって色彩がより鮮明に強調され、よりその巨大さ、圧力感がひしと伝わってきた。

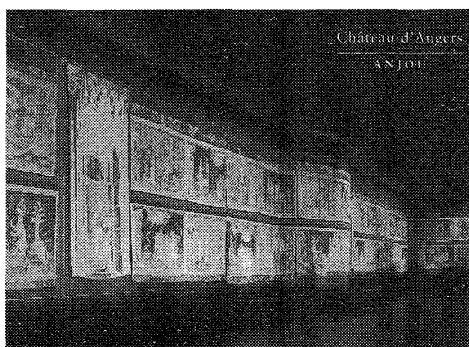


写真15 アンジェのタペストリーギャラリー

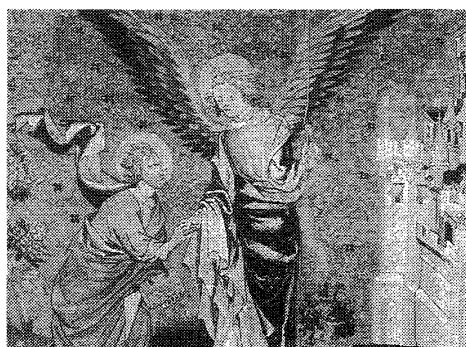


写真16 アンジェのタペストリー
(第74場面)

4. パリ衣装芸術美術館

ルーブル宮ロアン・ウィングにあるパリ衣装芸術美術館の企画展「Jouer la lumière (光を遊ぶ)」展を見学した。これは衣服に表現された“光”をテーマに、18世紀から20世紀までの作品が展示されていた。二部構成になっており、一つはテキスタイルに表現された光と影の効果について、様々なテキスタイルの表状はどのように光を扱うことによって変化するのか。もう一つは目的にあわせて変化する光について、部屋着、外出着、喪服、結婚衣装など、いわゆる流行と関わる服ではなく、用途にあわせて変化する光のニュアンスとは。テーマ、展示方法などモードの都パリの衣装美術館らしい洗練された演出に、いつも驚かされる。(写真17)

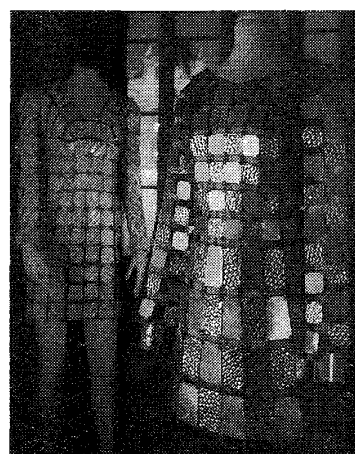


写真17 パリ衣装芸術美術館
「Jouer la lumière」の企画展

5. 衣装展示「ART TO WEAR」

第19回国際服飾学術会議において衣装展「ART TO WEAR」が開催された。この展覧会は1995年秋韓国において文化的企画の一つとして行われ、一般の人々、服飾の関心が深まったとして、96年デンマークでの国際服飾学術会議の企画に取り入れられ、99年の韓国に次いで今回のパリ、コンコルド・ラファイエットホテルでの展示は三度目となる。服飾の芸術性に焦点をあてた作品は、自由奔放な創造性と、遊びの要素を多分に盛り込んだ衣服造形美を、見る人の心に問い掛けているようである。素材も技法も多種多様。布以外の紙、金属、ポリエステル樹脂などが使われ、針の変わりにペンチを用いてのドレス作りも珍しくない。今回の衣装展は60点の出品があり、日本からの参加は13点である。会場はまさに装いの芸術の可能性を示唆する作品群であった。筆者もこの衣装展に出品する作品作りの段階で、ボディより浮遊する作品制作を楽しんでいる。(写真18)



写真18 「ART TO WEAR」展示会場

Ⅲ お わ り に

以上がフランスにて研修を行った概要の報告である。

モードの中心パリではファッションとともに建築物や、そのほか生活全般にわたっての洗練されたエレガントさと気品が漂う。ゆえに落ち着いたパリの街並みにはファッションがよく映える。

ファッションは人と世界を繋ぐメディア（媒体）である。その発信の中心であるパリは、何かを創ろうという人々に、創造のためのインスピレーションを十分に与えてくれると思った。

今回はじめてフランスの地方都市を訪れて、フランスはその歴史の中で様々な民俗が共存、融合しながら文化、習慣を形成してきた多民族国家なのだということを再認識した。それはリヨンの染織産業の発展の過程を垣間見て、よりその感を強くした。

また歴史的タペストリーとの出会いは今後の研究テーマを与えてくれた。タペストリーの美術形態を検討することにより、表現された服飾の細部を考察しながら、時代の流行や生活感情、風俗から当時の服飾美を追求できることと思う。

帰国してまだわずかの期間しか経ってなく、まだまだ未消化の状態だが、今後また違った角度から今回の研究を生かしていきたいと思っている。

(付記)

本研修は平成13年度北海道浅井学園大学短期大学部特別研究費交付研究の助成によるものである。

引用・参考文献

- 1) 服部照子：ヨーロッパの生活美術と服飾文化Ⅱ，源流社，1986
- 2) 辻ますみ：ヨーロッパのテキスタイル史，岩崎美術社，1996
- 3) S. ベルトラン：バイユーのタペストリー，EDITIONS OUEST，1996
- 4) 文化学園服飾博物館：紋織の美と技－絹の都リヨンへ－，大塚工藝社，1994
- 5) 京都服飾文化研究財団：ドレスタディ14号，1989